

平成30年度第1回清瀬市総合教育会議

平成30年度第1回清瀬市総合教育会議が平成30年5月23日午後1時30分に招集された。出席委員、議事の概要は次のとおり。

- 1 日 時 平成30年5月23日（水）午後1時30分から
- 2 場 所 健康センター第1会議室
- 3 出 席 者 渋谷 金太郎（清瀬市長）
坂田 篤（清瀬市教育委員会教育長）
宮川 保之（教育長職務代理者）
植松 紀子（教育委員）
粕谷 衛（教育委員）
兵頭 扶美枝（教育委員）
- 4 事 務 局 今村 広司（企画部長）
石川 智裕（教育部長）
南澤 志公（企画課長）
細山 克昭（教育総務課長）
- 5 オブザーバー 矢ヶ崎 直美（子ども家庭部長）
長井 満敏（教育部参事）
- 6 書 記 大津 雄平（教育総務課）

議事日程

1. 開会

2. 協議事項

(1) 21世紀を生きる子供たちを育むために我々行政は何をすべきか

(2) その他

3. 閉会

開会

渋谷市長が開会を宣言

(渋谷市長)

先日起きた新潟の事件は大変遺憾である。社会的土壌がしっかりしているまちは、このような事件は起きないはずであると考えている。

この総合教育会議も清瀬の子供を育てていく土壌をどうさらに良くしていくかという課題であると考えている。

(坂田教育長)

本会議というのはそういう土壌を育てる会議であるという非常に心強いお言葉をいただいた。

本日は「21 世紀を生きる子供たちを育むために我々行政は何をすべきか」をテーマに議論していく。各委員から発言をいただきたい。

(粕谷委員)

土壌というのが何を指して土壌か。我々一人一人の人間が土壌であって、この土壌の上で子供が育っていく。そう考えるとまず、我々一人一人が仕事、プライベート、様々な場面でいかに楽しんでいけるような社会、土壌というものができることがより良い子育てであったり、子供の育ちに繋がっていくのではないかと思う。一番近いところではそれが親だと思う。親が充実していなければ子育てというのはうまくいかないと考えている。

(兵頭委員)

人や物を生かしていくという発想が何歳になっても必要だと思う。地域を見れば仕事の第一線は引いたけれども元気な方がたくさんいて、自分のできることならやってみたいと思っている人もたくさんいる。そのような人が何か清瀬の行政に関われる環境を与えるためにも情報発信していくことも必要と感じる。

(植松委員)

子供が育つということにどのぐらいの大人たちが応援しているのか、それから社会的な土壌が健康になるために私たちがどう関わっていったらいいのか、今日はそのような話になるかなと思う。

(宮川教育長職務代理者)

隙間産業という言葉が今から何十年前かに出ていたが、あらためて現在、隙間だらけである。今回のこのテーマは隙間を1つ埋めていくことによって、更に良い市民サービスができるまちになる。そして私が考えていることは、0歳からの教育を具体的にしていくためには、大人たちがどうやって寄り添っていくか。それをリードするのがやはり行政だろうと思うが、ここがどこの世界でもあまり実現してないので、ぜひ清瀬でそういうことを実現できるような話し合いになれば嬉しい。

(坂田教育長)

今日のテーマは「21世紀を生きる子供たちを育むために我々行政は何をすべきか」。子供たちが育つための豊かな土壌を作るために、我々が何をすべきかと読み換えられるのではないかと思う。

まずは特に学校の力を高めていくために我々教育委員会、市は何をすればいいのか。まず思っていることを各委員から発言をお願いしたい。

(兵頭委員)

学校を取り巻く資源にはどんなものがあるのかということ、特に新しく着任したような管理職は知らない部分がたくさんある。そういうところなどは情報提供が必要だと思う。また、各学校で立てていく教育課程や特色等について行政側でも聞き取りをしたりしているが、そういうところで新しい一步を踏み出せる何か適切な助言とか、ヒントや聞き取りなどもしてもらいたいと思う。

(植松委員)

まず学校力を向上させていく必要があると思う。特に経営力となったら校長が主体になっていくと思うが、その運営を向上させていくのを手伝い、次に親が学んでいく。何を学ぶかということ、子供のこと、子供の発達その他のことについて親も学ぶ。その親も学ぶことによって今度は地域への誇りを子供が親を通して、あるいは学校の教育を通して地域への誇りを持っていくのではないか。

そのために子育て部局と連携していくということも大事だと思う。お互いに一人の子供、あるいは子供の育ちということに関して連携させていくことによって、清瀬の子供たちが清瀬に対しての誇りを持っていくのではないかと思う。

(粕谷委員)

学校に求められることは、量、質両面で増えてきている。それだけ学校という組織が頼られる存在になっていると思っている。それに全て応えていくのは

難しいとは思いますが、それに応えていくために外部の資源をいかに活用していくかということを前提に地域や保護者の要望に応えていけるか。

(宮川教育長職務代理者)

今年着任された校長先生は、いずれの方も今までになく教育に対する課題意識があり、清瀬で自分の力を発揮したいと思っていらっしゃる方が多いと思っ
て見ている。それだけ清瀬の教育をレベルアップするには好時期だと思う。

校長先生は何を焦点化、重点化していくか。あるいはそのために人の手とか
お金とかいろんなものが必要。そこのところをどれだけ市としての総合力を生
かして支援できる仕組みにしていくかということがポイントかなと思う。

そして、私は何かやる場合にはターゲットを絞って一点突破と考えれば、清
瀬は0歳からの教育ということを標榜して、その実現に向けて公私立の保育園、
幼稚園も含めて、隙間を埋めていかなければならないのではないかと思う。

(坂田教育長)

子育てという概念と教育という概念が実は清瀬は分離している。子育て部局
と教育部局という形でこれは分離して考えられている。本当であればこれは一
貫しているはず。就学前教育とどれだけ学校がリンクできるかというところが
一つの問題だろうと考える。

ここで、育ちの原点である幼稚園の経営者である市長にお話伺いたい。子供
を育てる1番の肝は市長は何だとお考えか。

(渋谷市長)

愛を具体的に示す、実現するという。当時4歳でお姉ちゃんのまねをし
て原稿用紙に書いた手紙をその母親が持ってきてくれたことがあったので紹介
したい。

「わたしは杉並の幼稚園からふじみ幼稚園に転園しました。始めは恥ずかし
かったけど頑張りました。頑張って幼稚園に行ったら行けるようになりました。
お友達が泣かないで行けば楽しくなるよと教えてくれました。夏休みがいつば
いあったから、少し恥ずかしかったけど今はちょっとだけ楽しくなりました。
ピアノを習っているけれど全然嫌い。」

これはお姉ちゃんの作文のまねして書いたと。それで母親からの解説の手紙
「園長先生いつもお世話になっております。先日部屋を整理していたら、たん
ぽぽ組の夏休み明けに書いた作文が出てきました。小学生の姉が宿題で転校し
てきたときのことを書いていたので、まねをして転園したときの作文を1人で
書いていたようで、とても面白かったので園長先生にも見ていただきたいと思

いました。こんなふうに考えていたのかとつくづく感じております。思えば杉並の幼稚園では学年で20人という環境でアットホームにとっても楽しく通っていましたが、自宅の取り壊しのため引っ越すことになり、感受性の強い娘は『おかあさんといっしょ』のテレビから3月に流れてくるお別れの歌を聞いては「悲しい歌だね」と年少ながらに呟いていました。転園してからも最後まで泣いていたように思います。2学期始め、3学期始めまで泣いていました。毎朝園長先生には抱っこで玄関まで連れて行ってくださり、それにもかかわらずあんまり愛想も良くなく心苦しく思っておりますが、娘のふじ組の目標は、なんと一度も休まないことのように、たんぽぽの6月から一度も休まずととにかく皆勤賞を目指して頑張っています。そしてもう一つはマラソン大会で6位に入るのではなく、1位になることだそうです。去年は11位でしたが、幼稚園の行き帰りで時間のあるときは走っていったり、金山の去年のコースを走ったり、犬と一緒に走ったり、とにかくよく練習しています。親としては負けず嫌いだしたこと、頑張り屋だったことは新発見でした。年中のときに比べてはるかに成長したなと感謝しております。卒園まであと少しですが、ふじみ幼稚園の先生方、お友達に感謝しつつ楽しんで通ってくれたらと思っております。長くなりましたが、今後ともどうぞよろしくお願ひします。」というお母さんからの手紙。

そのときの返事が「お手紙ありがとうございます。娘さんを抱っこしているときひそかにほほ笑んでくれたので嫌じゃないんだなと思っておりましたが、お手紙でよく分かりました。早速、ふじ組の部屋に行って他の子たちと代わる代わる抱き上げていったら、にこっとしてくれました。それにしても大変貴重な作文を見せていただきました。今後の子供たちの関わりの中でとても参考になります。十人十色の個性、その子らしさの中でその育ちを支えていきたいと思っておりますが、多く喋らない分、娘さんは秘めた力を持っていることがよく分かりました。また感じる力、そしてそれを表現する力、芯の強さがあります。成長が楽しみですね。娘さんが年中のときに自発的に書いたこの作文、子供たちの心の中を見せてくれている文章として私の宝物の一つになります。コピーさせていただきました。今後の幼児教育の重要参考資料に。ありがとうございます。」というような返事を書かせてもらった。

(坂田教育長)

今の話はまさに教育の原点の愛であって、園長先生の愛があるからゆえの手紙だと思う。園長先生にそうやって手紙を書いてくる親の愛もあると思う。

学校の教員が愛を持つのは、これは当たり前だと思うが、地域にも子供を愛してくれる人はたくさんいて、これはどれだけ子供を愛する人たちを学校に呼び込むことができるかだと私は思う。そういう経営をしなければならない。

ただ、そのためには先程兵頭委員からも話があったように、どういう環境があるのか、どういう資源が眠っているのかっていうことを我々が情報提供してあげることが必要だと思う。子供たちを愛してくれる資源、そのようなものを我々がいかに提供できるか。その力を活用して経営力を伸ばしてもらうことができるか。

次に家庭に関して行政は何をすればいいのか、親の学びの支援について。今までは子育てをおじいちゃん、おばあちゃんが教えてくれた。ところが今はマニュアル本とか子育て本に頼らなければいけない。そこには理想的なことが書いてあるから、自分の子供がマニュアルどおりに育ってないと不安になってしまう。それが高じてしまうと虐待につながる可能性もある。やはり親が学んで、親として成長していくということがやはり必要だと思う。

(植松委員)

親の学び、親が勉強する、あるいは知りたいということを手軽にでも行ける場所があると良い。悩んだときにスマホで調べるのではなく、そこへ行って気軽に聞ける人がいる場。もちろん幼稚園や保育園、その現場の先生が役割を担うことも可能だと思うが、それは親がその場に対する信頼関係を持ってなければ駄目だと思う。

(坂田教育長)

気軽に相談できる場、疑問を解消できるような、そういうものを行政はもっと充実していくべきだろうというご提案。

(矢ヶ崎子ども家庭部長)

相談しに行く場所については、健康センターにおいて、妊娠届けを出すときからその妊婦さんの気持ち、子供ができたことが嬉しくないとかそういう方は、その段階から保健師なりが寄り添いながらやっているところもある。

保育園に入れば当然保育園の先生が役割を担うことになるし、それ以外の方についてはピッコロ、ウイズアイなどのNPO法人が支援することもある。子育てについて勉強する講座や、実際家庭に入ってお手伝いすることも行っている。それをより多くの皆さんに知ってもらうために子育てクーポン事業も始めている。

(坂田教育長)

それだけ充実しているにもかかわらず相談に来ない親も存在すると思うが。

(矢ヶ崎子ども家庭部長)

実際にそのような方もいるが、健康センターで実施している検診で相談ができる。そこにも来ないという困ってしまうが、生まれたばかりのときには保健師や看護師が訪問に伺っている。

(坂田教育長)

学校に入るともっと不安になる。学校で例えば進学とかクラスに馴染めないとか。何かうちの子はちょっと学力が遅れているのではないかとかいろんな不安がある。学校はその不安を受け止める窓口になっていないのか。

(長井教育部参事)

基本的に小学校の場合は学級担任が保護者には一番近い存在であると思う。学級担任を通してスクールカウンセラーとか。学級担任がちょっと話しづらいということであれば他の学年主任であったり管理職であったりというところがその窓口になる。

(坂田教育長)

これが幼稚園ではどうか。親の相談を受けることは多いのか。

(粕谷委員)

小さな相談は日々ある。ただ、大きい問題になると恐らく専門家の方へ相談になると思うが、その小さなところ、直接いきなり専門家のところというのにはやはりハードルが高いところがあるので、そこまでの間のつなぎ役という意味では機能していると思う。

(坂田教育長)

昔、学校はPTA主催の家庭教育学級があった。いわゆる親学だと思うが、あれは今も実施されているのか。

(兵頭委員)

今でもPTA組織でそういう講演会のようなことをやっている学校もあると思う。ただ、なかなか人が集まりにくくなっていることはある。体を動かした体験型の方が人気があり、座学で受け止めるだけというのはなかなか人が集めにくい。

(坂田教育長)

本当は悩みがあつて勉強してもらいたい人たちが、なかなかここに足が向かないというところもある。

これは、主体的に学ぼうとしている人は全く問題なくて、相談に行ける人も問題ないと思う。そこから漏れてしまう人、そこまでたどり着かない人が一番苦労しているのではないかと思う。

(宮川教育長職務代理者)

その相談という環境から少し離れるが、一番の環境は、例えば幼児教育の部分でいえば幼稚園と保育園だと思う。ここで保護者の皆さんが学べる環境になっているかどうか。だから、これはどこがどうかという議論ではなくて、全体を底上げするような仕組みによって今の就学前の教育の部分でいう隙間の部分を埋められないかと思っている。

(渋谷市長)

テレビコマーシャルを見ていると、台所は菌だらけなんて、そういうコマーシャルが子育てを邪魔してきているのではないかと思う。泥んこだらけになるということに抵抗する親もいる。

本物の子育てができなかったら、人類ここまで来ていないわけで、何も今から最高の子育てだって、そういうことでは絶対ないはず。子育ての基本中の基本をしっかり押さえながら、技術を取り入れた新しい展開は、それはそれだということだと思うが、とにかく、本当の人の喜びとは何か、そういうものを小さい時期にしっかりと実感させていくということがとても大事だと思う。

(坂田教育長)

学級内もいろんな個性の子供がいて、善ばかりではない。学級っていうのは善の集団ではなくて悪も一部あったり、どろどろしたものもあったり。いろんな環境の中でそういうところに囲まれながら、問題を解決しながら子供が育っていく。それを全部今は大人が介入して、全て善の色にしようとしている。いじめはいけない。全員の人と仲良くしなさい。でも、全ての人と仲良くすることはできない。大人がそれを一番よく分かっている。嫌いな人もいる。そういうあまりにも理想的なことをやり過ぎることによって子供が育たなくなっている。

今、宮川職務代理者と市長がお話しされていたのは、幼稚園も保育園も子供が育つだけでなく親も育つ場であるべきということだったが、実際にそのような機能はあるのか。

(粕谷委員)

直接的に親に何かを投げかけているというところはあまりないが、子供が集団生活を始める、保育園だったら0歳から、幼稚園の場合は3歳から集団生活を始めると、今までなかった子供同士のトラブルというのが集団に入ると必ずある。そういうことを体験して親も学んでいく。意外と子供の本質をマン・ツー・マンで見ているときは分かっていない方が多いと思う。うちの子はそんなことはしない、そんな子じゃないと最初はそのように言うが、実際親の目を離れて集団に入ったときの姿が本来のその子の姿に近いと思う。それを繰り返し見たり伝えていくことで、うちの子はそんなに悪いことはしないわけじゃないし、みんな子供はいたずらが好きだし。そういったことを学ぶという意味では、学びの場にはなると思う。

(坂田教育長)

子育ては自己を育てる。子供を育てているということは自分も育てていることになる。子供から親はたくさん学んでいるはずだが、そこを忘れてしまう。だから、それに気付かせてあげるというのがもしかしたら教育機関かもしれない。

(兵頭委員)

あまり難しいことを親に要求するというよりも、身近にできる、こんなことをやるのが子供に愛情を持つことなのだなというような。先ほど10年前の手紙をきっちりファイル化されているのを見て、親は子供の成長に合わせてそういうものを残していると思うが、その時々そういうものをスクラップブックにして持っているだけでも子供にはすごく愛情として伝わると思う。身近にできることで、親がこれだったらうちでもちょっとやれるかな、そういうワンポイントのメッセージみたいなものが何かしら発信できるといいと感じる。

(坂田教育長)

兵頭委員がおっしゃったように、幼稚園、保育園、学校、親が集まれるような場所では、難しいメッセージを発信するのではなくて、簡単なメッセージを発信して親も育てるんですよというようなことに気付かせてあげる。これがいわゆる溝を埋めていくことになるだろうと思う。

最初の議論に戻るが、まちの中で反応してくれる大人をたくさん作る、これがいわゆる地域の教育力に繋がっていく。

(植松委員)

今のお話を聞いていて、遊びがない幼稚園、保育園というのは、もっと遊ぶよう指導するべき。

学校でも 20 分休みとか、小学校低学年は先生も一緒に走ればいい、遊べばいいと思うが、遊びができない大人がいっぱいいる。どういうおもちゃを使ったらいいんですかと相談がある。身体ひとつだけでも遊びになるということから説明しなければならない時代に入ってきている。だから、遊ぶ、遊びっていうことをもっと言っていかなければならないんだろうなと思う。

(坂田教育長)

本当はそういう遊びは伝承されてきているはずだが、どこかで分断されてしまっている。遊び方まで教えなければならない時代になってきている。

これはあらがえないところがあるかもしれないが、もう一度親が集うような場所を幼稚園、保育園、学校、こういうところであなたも育てているんですよというメッセージが必要である。お母さんも遊びましょう。難しいこと言わないでそういうメッセージを発信することが必要かと思う。

次に、地域に対して何をすればいいか。

(宮川教育長職務代理者)

子供の育ち、遊びという問題の議論があった。場づくりという話も出たが、行政としてどうしたらいいかという、高齢者の方々がいわゆる可処分時間とか資産とかをこのまちの子供たちのためにどう提供していただけるか。そのようなことをもう少し幼稚園、保育園、あるいは小学校も含めて、またはそれをどのような仕組みでやっていけるかということを行政として仕組みづくりを考えて実現していくことが重要だと考えている。

(渋谷市長)

市内在住の 80 歳になる建具屋さんが一生懸命に活動している。材木を自分で加工して子供たちに本棚作りを教えている。子供たちも自分で作ったという感激がある。本人も前はちょっと遠ざかっていようということがあったが、今はすっかり変わって子供たちとの関わりの中で、その人のある意味で魂が洗われたみたいな感じがする。

(兵頭委員)

三小のサタデースクールでお世話になり、自ら材料を用意してくださり、そしてほんとに子供たちと関わるのがすごく楽しいと。そして、またやりたい、他の学校でもやりたいところがあったら教えてください、などと言うぐらい前

向きな方だった。

(宮川教育長職務代理者)

そのような方を、もっと清瀬の市民として共有できることが文化づくりだと思ふし魅力づくりだと思ふ。そういう魅力ある人がいるということを知らないだろうし、私も今初めて聞いて、やはり、そういうものをもっと大事にしていく、そういうものはもっと他にもあるだろうと。そういうものを広げていくようなこと、それもやはり行政の仕事なのではないかと思ふ。

(粕谷委員)

その方が別の学校でもってやってみたいとおっしゃっていたとのことだが、学校間のつながりだけでなく、例えば行政としてそういったニーズがある場所にその情報を取り持つみたいなきことはできるのかなと思ふ。

(坂田教育長)

例えば、第三小学校で地域資源を活用してこのような授業をやっていた。これをやってくださった方が他の学校でもこれをやりたいらしい。こっちの学校では物づくりを体験させたいと言っていた。これをつないであげるといふことはできるか。

(長井教育部参事)

それは可能だと思ふが、今のところはどちらかという点と点の間に入るみたいな形。それをもう少しいろんな、この分野ではこの方というよふな、人材バンク的なものに将来的なっていくともっと活用しやすくなってくると思ふ。

(宮川教育長職務代理者)

そういうことで、行政が校長先生方にこういう資源がありますよというところでお互いに共有し合つてそれを生かし合ふよふな仕組みが必要。

(坂田教育長)

実は学校支援本部のコーディネーターの会議というのが昨日あり、そこで全く同じ議論になった。ここの学校でこんなに大きなイベントをやるから、例えば地域のボランティア人材をこっちの学校から貸してくれないか、こういう動きが出始めている。

もちろん幼稚園レベルでも地域の資源をたくさん使いながら、教育活動をやられていらつしゃつたり、地域の方々を呼んだりいろんなことをやられていら

っしゃると思うが、こういう機能を幼稚園、保育園で持たすことはできるか。

(粕谷委員)

今個人的にやってみてみたいなっていうのは、一人ないし二人の保護者が一日保育士、一日幼稚園教諭という形で希望者を募って一日先生の補助という形で入っていただく。やられたところの話を知ると非常に良いと。保護者の方が良かったと感じている。ということと同時に、これは園側に対しての理解が深まる。そんなに難しいことではないのかなと思う。

(植松委員)

情報発信機能を充実させることも重要だと思う。市報や教育委員会日より、あなたの学校出てるよなんて言われたら毎回見るようになると思う。

(坂田教育長)

学校のホームページはだいぶ充実してきた。リアルタイムに情報が更新されるようになってきている。そういう電子媒体での広報はたくさんやっているが、まだまだ十分ではないと思っている。

(兵頭委員)

学校支援本部の連絡会が昨日あったと伺ったが、そのようなものがあるというときに、今設置されているところのコーディネーターには連絡が行くのだろうが、そうでない学校の方にもそういうものがありますということが、例えば市報のどこかに紹介があれば参加しやすいのかなと思う。今やっている人たちはもちろん必要感があって行くが、そうではなくて、これから始めようという人の一歩というのがあるといいと思う。

あとはやはりボランティア講座。地域ボランティアをやるための講座というのは様々な種類をやっていると思うが、それはあくまで個人情報の取り扱いの問題とか、子供とかそういう人に対する声掛けの基本的なところとか。本当に社会に入ってボランティアをしようというときに、自分が最低限のことは知った上で入っていくという何か安心感が得られる講座はやっぱり行政が声掛けしてほしい。そういうものがあると学校支援本部だけのボランティアではなくて、例えば市にいろんな行事があってボランティアが欲しいものがあったりすると、こういうボランティアで活躍できる場面もあるというような、そういう紹介も含めて、自分でも役に立てることがあるというような窓口になると思う。

(坂田教育長)

ボランティアセンターっていうのはそういう役割を果たしてないのか。

(南澤企画課長)

ボランティアセンターではボランティアを求める側とボランティアをしたいという方々とのつなぎをすることを社会福祉協議会が行っている。また、ボランティアの意義の啓発といったようなことも関連する取り組みとしてやっている。

(坂田教育長)

ただ、そこと学校支援本部はリンクしていない。まさに最初の議論の分断というところ、これもそういう実態がある。

(宮川教育長職務代理者)

今、大学生を教育していて採用試験に向かう子たちを面倒見ているが、いわゆるジェネリックスキルテストを2回やっている。1年と3年で。社会人として必要な力、この中でやっぱり行動持続力というのが高い子は結果を出している。だから、子供たちはこのまちで学びを通して社会人になって成功する子供たちを育てる、それを市民全体で責任持って、自分の園だけじゃなくて、自分の園の特色は出して頑張りながらも。それが経営努力。そしてこのまち全体がレベルアップすることによって、やっぱり清瀬が良いと言う人たちを増やしていくようにするために今までの行政のそれぞれの部局で一生懸命やってきたところをもう少しつなぐ仕組みを考えていかななくてはならないと思っている。

(坂田教育長)

子育て部局と連携強化を図っていくべきだというような議論をしているが、様々な現実論があり、なかなか教育との連携って難しいと感じている。

(石川教育部長)

連携強化をやろうと言って連携がうまくできたっていうのは100件に1件あるかないか。本当の連携強化は難しい。スローガンでしかないと思う。そういう目で見ると、どうしても教育委員会と子ども家庭部にはお互い壁があって、分かっているが忙しくて進まない。保育園との連携って分かっているけど具体的に何をすれば良いのか、どうやったら小学校とつながっていけるのか、非常に難しいと思うので、例えば組織改正をするのであれば、ゼロから中学校までの教育を、子ども家庭部の大半の所管を教育委員会と同じ枠の中に入れてしまうというのは嫌でも意識改革になる。それによって理念よりも具体的に職員

の意識は変わらと思う。

(坂田教育長)

連携強化という言葉があまりにも形骸化してキャッチコピーで終わってしまっていると。これを実働化させるためには組織改正も考えていかなければならない。そういう話もある中でそれが現実論として動いていく可能性もゼロではないと思うが、現時点での連携強化はやはり難しいか。

(矢ヶ崎子ども家庭部長)

学校との連携強化の前に、やはり保育と幼稚園、そちらの連携がまだそんなにできてない。幼稚園に通う子供と保育園に通う子供が五分五分になってきている。その子供たちが小学校に上がっていく。保育の方も今は公立が減ってきて私立が増えてきている。清瀬市としての育てほしい姿というのはいろいろ出ているが、清瀬市として一本の軸を作った方がいいのかと感じている。

(坂田教育長)

一本の軸というのがいわゆる組織という面でもかもしれないし、カリキュラムという面でも出るともかもしれない。

(粕谷委員)

幼保の連携が図れてないという話だが、育てたい子供のイメージであったりとか、目標みたいなものを共有することはできると思うが、そもそも成り立ちの違うものであるので、まずそこを。連携は、全くに近いぐらいできていないと思うので、それをなしに保幼小連携というのは、それこそ形骸化してしまいかねないと思う。

(坂田教育長)

非常にチャレンジングな問題意識である。保育園と幼稚園はなかなか共有できない。この同じことは、私立幼稚園も経営方針があるから協働連携はなかなか難しいと思う。

(宮川教育長職務代理者)

幼保、公私立が一緒になってまちの発展につなげようということをやっている自治体は幾つかあると思う。

石川教育部長のご提案のような、ある部分の一つにしてそこにそういう使命を果たすような組織っていうことも具現化していくこと、ぜひそんな方向も議

論し、検討していただきたい。

(坂田教育長)

本日の議論の視点は、学校に対して我々行政は何をすべきだったが、これは経営力の向上支援というところにピンポイントで議論した。やはり地域の資源を使って子供に愛を注げるような環境、そういう人材をどれだけ学校の方に向けさせるかというところ。そのためには学校支援本部というような施策をより一層行政として推進していくということ。また、資源の情報提供の必要性、子供の育ちというのは一貫しているということが原点であり、それに対する経営者の意識、いわゆる校長がそれだけの意識を持って経営を行ってもらいたい、そこを我々は指導していかなくてはいけないという議論だった。

家庭、親の学びの支援については、まず何よりも気軽に相談できる場が必要だろうと。今でもそういう機能はあるが、より一層そこを充実、強化していく必要がある。なかなかこれは難しい話であるかもしれないが、こういう基本的な方向性は見えてきた。あとは親の学びの場というような意見もあったが、これは子供の姿を通して学ぶ。実は学校というのは子供を育てる場、幼稚園も保育園も子供を育てる場だが、実は親が育つ場でもあるということをありとあらゆる場面を通して情報発信をして啓発するというのが議論にあったかと思う。

次に、地域の誇りを更に高めていくためには、やはり教育資源をどんどん活用していく。それとともに情報がやはり十分ではないので、情報発信を更に強めていく必要があると。また、地域ボランティア講座というようなものも具体的に我々がやっていく必要があるというお話もあった。

今話を充実させていく上で我々の組織はどうあるべきかだが、これが恐らく0歳から15歳まで一貫した形で資質能力を育てられるようにしていく必要がある。そのためには連携というような言葉ではなくて、まさに組織の編成をもう一度考えてみる。教育委員会と就学前教育を合体させてみるというような非常に思いきった議論もあった。

組織というものはその理念を具現化していくために非常に重要なファクターとなるので、どういう組織であるかによってその方針が見えてくるところがある。だから、子育て部門と教育部門が一体化した組織があるということは、0歳から15歳までの教育に力を入れている清瀬であるという情報発信になると思う。まさにPRになる。清瀬で子育てをやりたい、教育を受けさせたい、これが人口減少に歯止めをかけていくとか、もしくはより一層地域を活性化させていくとか、そういう社会的課題にも対応していくことになるのではないかと思う。

(宮川教育長職務代理者)

やはり、我々の仕事というのは理想というか、目標があって現実との差をどうやって埋めるのか。この現実の差になっているものは何なのかっていうことをもう一度きちんと整理しないといけないだろうと思う。今日は少しそこにくさびを打ち込むことができたと感じる。

(渋谷市長)

それぞれ形式的な会議とか議論をしても何の意味もない。子供たちと関わるのと全く同じ。形式的に子供たちに関わって子供が感じるかといったら、感じない。とにかくよろいかぶとを全部脱いで裸で子供たちと関わり合うと本当に子供たちは生き生きしてくれる。だから本日の会議そのもの、ここが出発点。出発点でやはりいろいろ、それは土俵の枠から外へ出たりするところもあるかもしれないが、やはり何か率直に体裁なんか取っ払ってどういう方向を探し出したらいいんだとか、どういう具体的なことを探し出したらいいんだという。とにかく、ここがまずそういう本物でなければ、絶対教育が本物になるわけがない。だから、こうして本物を目指して本日も会議ができたってことはありがたい。

子供が健やかに成長するためには今後も教育委員会と首長部局が一層連携して、家庭に対する支援を検討していくことが必要となると考える。

閉会

市長が閉会を宣言

午後 3 時 5 分閉会